



中嶋朋子さんプロフィール

1971年、東京都生まれ。国民的テレビドラマといわれた「北の国から」で22年にわたり瑩役を務める。以後、映画、舞台へも活躍の場を広げ、実力派として高い評価を得る。ほかに、朗読、執筆、講演でも独特の感性を発揮。また、エコロジストとしてのやわらかなライフスタイルが注目を集め、自然と人を結ぶ環境メッセンジャーとしても活躍する。



中嶋 朋子

(女優) さん

“環境メッセンジャー”として伝えていきたいこと 洞爺湖サミット記念上映 環境映画 「KIZUKI」に出演して

「環境に優しい暮らし方を」と言うと、少し窮屈だったり、面倒だったりと感じる人も多いでしょう。中嶋朋子さんは、それを「心地よく住まうこと」と、さっぱりと言います。洞爺湖サミットを記念して上映された映画『KIZUKI』に出演した中嶋さんに、ストーリーから製作スタイルまで、環境映画としてのチャレンジに満ちた作品の製作秘話や、エコライフの楽しみ方などのお話を伺いました。

“気づき”と“築き”
環境映画

「KIZUKI」の願い

― 出演を決められた動機は？

環境の問題を伝えることは難しく、最初の第一歩を高いとか遠いとか相手を感じてしまうと、なかなか浸透していかないと常々考えていました。この映画は、教育番組的なタッチではなく、エンターテインメントとして楽しめる映画の切り口で環境問題を描こうということで、台本を読んだ段階から興味をもちました。

それから……、こういう仕事をしたいと、心ならずも環境に良くない動きをしてしまうことが多くて罪悪感があります。映画を一本つくと、たくさんごみが出るんです。でもこの映画では、使い捨てを止めて環境に負荷をかけない製作スタイルを貫き、例えばお弁当も、最初は少なめに配って欲しい人はお代わりをし、ムダを出さない。割り箸や紙コップなどは使わない。そんなところにも強く惹かれました。

― 上映法も独特のスタイルですね。

今の環境の現状を広く知ってもらうために『地球を救う10万人』の会員（賛同者）を募り、作品のDVDを配ってしまおうと。普通はあり得ないですよ（笑）。上映も、「上映したい」とお声をかけていただいたと



緑を愛し、自然を守る伝統が生きるイギリスを旅し、地球とつながる新しいライフスタイルの芽ばえに心かよわせて

北海道の自然から学んだエコスタイル

ころだけにしていただきました。
それは、会員になってくださる、
声をかけてくださることが、環境の

悪化を食い止めることに能動的にな
る、意欲を投じていくことにつな
がると考えるからなのです。

——普段から「マイカップ」を携帯
されていると伺いましたが？

近ごろはほかの現場も、紙コップ
でも名前を書いて何回か使おうと
か、少しずつ変わってきています。
使い捨てはコストもかかりますし
ね。だったら「マイカップ」を持っ
てきたほうがよさそうなものです
が、そこで目くじらを立てても仕方

ない。やってみたいな、そのほうが
素敵だな、楽しそうだなと思わな
ければ長続きしませんから。

私は、あまり使い捨てをしたく
ないので自分で用意していますが、
使っていると「それ、なあに」とた
ずねられる。そこから少しお話がで
きて、徐々に広がっていくといいな
と思っています。

——そんな中嶋さんの感性の源はな
んでしょう？

……、やはり『北の国から』とい
うドラマで、小さいときに富良野の
自然のなかで、翻弄されたり遊ん
だりという経験をしたことが大きい
かもしれません。気持ちがいいこと、
楽しいこと、手触りがいい、にお
いが落ち着く、野菜の味がおいしい……、
私のなかのベストをあげていくと自
然のなかにいることに通じます。

富良野では、先に現地入りしたス
タッフや地元の方がサポートしてく
ださったのですが、8歳からです
から。「絶対に人が通った道以外は通
るな」と言われても、どこが道かさ
えもわからず、たちまち土蜂に刺さ
れたり、ひどい目にもありました。

洞爺湖サミット記念上映 環境映画

「KIZUKI」

STORY

物語は、食卓で少年がひとりテ
レビを見る場面から始まる。映
し出されるのは森林伐採、地球温暖化の
危機などの衝撃的な映像。ふと少年は、
亡くなった祖父との約束を思い出す。海岸
でみつけた不思議な種。祖父はその種を丘
に埋め、実をつけたら、種を少年の家の
庭に埋めてほしいと頼んだのだった。少年
は家を飛び出し、思い出の島へ。1粒の種のためにたったひと
りで旅をする少年の純粋な思いが、周囲の大人たちに勇気と気
づきを与えていく。



出演／中村大地（少年）、中嶋朋子、鶴見辰吾

峰岸徹、遠藤久美子

監督／瀬木直貴 企画・製作／内田 弘

「地球を救う10万人」

映画「KIZUKI」の製作を支援し、上映を成功させよ
うとする、原則として個人参加の任意団体。賛同金は
2000円で、賛同者にはDVDと賛同者名簿が送られる。
「観る」ことを事前に約束する人の広がり、製作その
ものを支える。

お問い合わせ：映画「KIZUKI」製作委員会事務局 TEL：0942-51-6111 HPアドレス <http://www.eigakizuki.com>

あの木もれ日を、あの日だまりを守りたい

——息子さんと自然教室に参加されているということですが？

都会の子どもって、行く前はイヤがるんですよ。「泥んこになるのヤダし、虫もヤダー」って。でも、遊んでいるうちに「アア、それもう洗濯たーいへん！」とこちらが思わず叫ぶほど夢中になる（笑）。そして帰るころには「ああ楽しかった。また来たい！」に変わります。

すべて管理されている環境で暮らしていますから、自然のなかには危険もあるということさえ知らなくて、ターザンごっこをしようと思いつけば、目の前の蔓にいきなり飛び

ついてしまう。確かめてからってことをしません。

——自然との関わり方を教えてくれるのも、自然教室の魅力ですね。

残念ながら、教えられるだけのノウハウが、すでに私たち親にもありません。自然教室では、「ほら、棘のある木、さわってごらん。尖っているから気をつけてね」なんです。親だと「避けましょう」と言うところですよ。子どもは好奇心が旺盛ですから、さわって「あつ、痛い！」そういう体験から身につくことが、とても大切。考えただけではわからない、知らなければたり着けない

ことってあると思います。

「自然を守りましょう」と言っても、自分にとっての実感がなければ、なを守るのだからわからない。種がまかれるかどうか、とても大切だと思います。あの美しい自然を残したいからといって、そこだけ切り取ったようにぼっこり残しても、自然は残りません。人も自然の一部として共存していくためには、さらに知恵が必要なのです。



地球環境基金からプレゼントされたオーガニックコットンのマフラーにっこり

本当に欲しいものを選びとる暮らし、それがエコライフ

——中嶋流ライフスタイルを教えてください。

私は、お買い物にすごく時間がかかるんです。「この子はうちに来てどうかしら、ずっと仲良くできるかしら」と考えてしまつて。私たちは、欲望は捨てられない。でもモノは捨てない暮らしをしたいですから。

最近、リネンのテーブルクロスの良いさを知りました。高いし、すぐしわくちゃになると思っていたのですが、使う1、2時間前にテーブルにかけ、霧を吹きかけておくだけでア

イロンもいらない。だいいち、しっかりと生えて一生使えます。こんなふうに、年齢を重ねれば重ねるほど知恵が増えていく。そうして自分が選びとってきたモノを自慢するおぼあちゃんになりたいです（笑）。

——環境イベントなどに参加され、一般の意識変化を感じますか？

「マイ箸」、エコバック、水筒を持ち歩く……、すぐにできる小さなことは、なさる方が増えていますね。なので、次のステップに行く時代かなと感じます。NGOやNPOの

活動などに参加すると、こういう大きな動きが一般の方のほうにも流れていかないかと思います。そして、人と人がつながって環境のための取り組みをしていけるような、次のステップに進みたいですね。

私自身は、難しいですけど、経済と環境のつながりに目を向けていかなければと思います。より良いものを求めていくんだという自負をもっているのか見極める、本当の意味でグローバルな視点を持ちたいですね。



大好きな絵本「ピーターラビット」の作者・ビアトリクス・ポターの農場にて。彼女の生きた時代のまの自然や家や農場に感動